

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 13 日現在

機関番号：24303

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2010～2013

課題番号：22790502

研究課題名(和文) 芸術的アプローチ(漫画)を用いた医療イノベーション戦略研究

研究課題名(英文) Strategic medical innovation studies with artistic approach

研究代表者

古野 優一 (Furuno, Yuichi)

京都府立医科大学・医学(系)研究科(研究院)・助教

研究者番号：20453102

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円、(間接経費) 810,000円

研究成果の概要(和文)：医師が行う病状説明は時に患者側には難解で理解困難であり，特に脳卒中のような救急疾患では患者家族の驚愕と動揺，時間的制約という要素がより一層理解を困難にさせる．本研究では脳卒中患者の家族に入院時病状説明を行う際，医療用漫画も提示し読んでもらった後，落ち着いた段階でアンケート調査を行った．

「このような医療用漫画が普及すれば良いか？」との問いに94%が「とても思う」「思う」と答え医療用漫画の普及への患者側の強い期待が明らかとなった．一方「医師の説明理解に役立ったか」との問いに「役立った」「とても役立った」は7割にとどまり，字数や絵のバランス，ページ数の改良を希望する声があがった．

研究成果の概要(英文)：There remains the gulf of understanding that exists between doctors and patients on the clinical conditions. Especially, the emergent situation like strokes widens this gap because patient's families cannot understand technical terms under time constraint. Therefore we propose medical comics as a tool to bridge the gap so that we as doctors give informed consent to patients and families intuitively, quickly and comprehensively. We carried out a questionnaire survey to investigate how these comics help stroke patient's family. Ninety four percent would prefer that medical comics should be applied to other medical case, however only 70% rated these comics as useful in terms of the level of understanding for doctor's explanation.

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：境界医学・医療社会学

キーワード：医療の質 漫画 インフォームドコンセント

1. 研究開始当初の背景

近年、「インフォームド・コンセント」という概念が普及し、患者さんとその家族にとって自己あるいは家族の病状を理解したうえで、医療における意思決定を医師と患者さんとが分かち合うことが求められている。しかしながら、医療者側の「病状説明」に対する患者側の理解度は必ずしも十分なものではなく、「医療者側と患者側の溝」という課題が現在でも蔓延している。

脳卒中の臨床においては、切迫脳ヘルニアを呈し、救命目的の外科治療を遂行するまでに一刻の猶予もない局面が少なからず経験され、昏睡状態の患者さんに治療決定権を説明する術もなく、切迫する病態、病態解剖、治療法、治療後の機能予後を理解した上での治療選択は患者家族に委ねられている。

医療者は時間的制約の中で脳神経解剖、機能解剖からその病態と外科治療、術後経過、機能予後にいたるまで専門性の高い多量の情報に簡潔に説明するものの、患者家族には驚愕や動揺があり、ごく短時間でこれらを正確に理解して意思決定するには常に多くの困難を伴う。

脳卒中患者では、治療によって予定どおり救命された場合でも何らかの機能障害を後遺する場合が多く、患者さんおよび患者家族は後遺障害の受容と介護に直面することになる。この脳卒中慢性期において初めて真の病態を把握する患者家族も多く、「医療者側と患者側の溝」が問題となる。

近年、「情報伝達」のメディアとして日本独特の「芸術的アプローチ(漫画)」が注目されており、商業広告や教育現場などで「芸術的アプローチ(漫画)」が積極的に導入されている。「芸術的アプローチ(漫画)」は「文字表現」と比較して一瞬のアイキャッチに優れ、圧倒的な視覚効果で情報伝達が可能であり、内容理解への動機付けや興味を喚起し、ストーリー性による優れた情報有効率(記憶度)を有する利点が評価されている。

当施設では、京都精華大学芸術学部マンガ学科と共同研究を行い、「インフォームド・コンセント」に芸術的アプローチ(漫画)を加えることで脳卒中医療における「医療者側と患者側の溝」を解消すべく努力してきた。病態解剖や治療法および機能予後、さらにリハビリテーションから在宅管理に至るまでの詳細な病状を、現実に即したストーリー展開で解説し、必要な解剖図譜もわかり易くデフォルメした病態説明用芸術的アプローチ(漫画)「くも膜下出血」「高血圧性脳出血」を作成して、緊迫した脳卒中の臨床現場で使用し、報道機関などの取材を受けて一定の評価を得ている。

しかしながら、「芸術的アプローチ(漫画)」を用いた病状説明にどのような教授効果があり、患者さんと患者家族にどのような不利益があるのかという実証的研究がなされて

いない。

本研究は、「芸術的アプローチ(漫画)」を用いた病状説明の有用性と不利益をアンケート調査を用いて解析することにより、「インフォームド・コンセント」における時間的かつ空間的問題を解消し、医療の質と患者側の満足度を向上させることを目的としている。さらに、本邦独特の文化的要素「芸術的アプローチ(漫画)」を「インフォームド・コンセント」における新たなモダリティとして確立することで、世界的な普及も期待される。

2. 研究の目的

「くも膜下出血」「高血圧性脳出血」の診断で京都府立医科大学付属病院脳神経外科に外来通院中の患者さんと患者家族に対しアンケート調査を行い、「病状説明用漫画」第一版が作成された2004年6月以降にそれを使用して病状説明を行った群と、「病状説明用漫画」の使用開始以前に病状説明を行った群の、病状説明に対する「満足度」および「マイナス評価」をレトロスペクティブに比較検討する。

研究期間内の新たな初診患者さんに対して「病状説明用漫画」を使用して病状説明を行い、患者さんと患者家族の病状説明に対する「満足度」と「マイナス評価」をプロスペクティブに調査し、その特性を重回帰分析を用いて評価する。

上記の調査結果を踏まえ、「芸術的アプローチ(漫画)」の特性を明瞭化して有用性を実証し、「インフォームド・コンセント」の新たなモダリティの一つとして関連学会ならびに学術誌に提唱する。また調査結果からその特性と患者さん、患者家族のニーズをフィードバックし、新たに急性期、慢性期を含めた他疾患の「病状説明用漫画」の作成を、京都精華大学芸術学部マンガ学科(代表:竹宮恵子)の研究協力を得て行う。新たに作成した「病状説明用漫画」においてもアンケート調査を継続する。

「漫画」は日本で独特に発展した大衆文化であり、かつ、メディアであり、子供から大人までなじみある娯楽である。近年においては、「漫画」は娯楽メディアとしてのみならず、万人受けする親しみやすいコミュニケーション手法として、企業はもちろん官庁や自治体までもが「芸術的アプローチ(漫画)」をツールに採用している。

圧倒的な視覚効果で情報伝達が可能であり、内容理解への動機付けや興味を喚起し、ストーリー性による優れた情報有効率を有する「芸術的アプローチ(漫画)」を、体系的に「インフォームド・コンセント」に取り入れ、「インフォームド・コンセント」の持つ時間的・空間的問題を解消し、医療の質と患者側の満足度を向上させようとする研究は世界的にもなされていない。

「漫画」の普及と発展は、日本が世界を圧倒的にリードしており、海外からも少なからぬ注目を受けている。この完成度の高い日本独自の文化を、深刻な緊張状態にある医療現場に導入し、患者さんと患者家族の心理的不安と動揺を軽減し、治療選択の判断に冷静さを与えるという独創的発想と着想は世界的に見ても類をみない。

研究協力者である京都精華大学芸術学部マンガ学科(代表:竹宮恵子)は、国内外の学問としての漫画研究をリードしており、京都国際漫画ミュージアムの発展にも多大なる貢献をしている研究機関である。これまでの3年間にわたる共同研究により、「インフォームド・コンセント」における「芸術的アプローチ(漫画)」に関しては、両研究機関ともに膨大な知識が蓄積されており、これらの科学的実証や応用については容易に研究を開始・発展できる準備と環境が整っている。

伝統と文化を重んじる京都という地域での研究機関の連携により、各々の研究機関の研究資源を有効活用することにより、本研究はさらに高度化し、個性的で独創的な特色あるものとなる。

3. 研究の方法

医療者が行う病状説明に対して、患者さんと患者家族の内容理解度も含めた「満足度」と、嫌悪される因子(長時間の説明、グロテスクな表現等)内容理解に不足する因子(期待される基準に不足する因子)など「マイナス評価」に関する自己記入型アンケート用紙を作成し、患者さんと患者家族を対象としたアンケート調査を行う。本研究では「満足度」と「マイナス評価」の定義を「患者さん、患者家族が個別かつ主観的に認識した、病状説明を行う医療機関ならびに病状説明内容に対する肯定的評価と否定的評価」とする。調査項目、評価基準、評価点を設定してアンケート用紙を作成し、総合得点、総合満足度を評価する。

対象は平成22年4月1日以降に京都府立医科大学付属病院脳神経外科で外来通院を行っている患者さんならびに患者家族と、初診で新たに加療を開始する患者さんならびに患者家族である。抽出方法は各主治医(当施設脳神経外科医9人)を通じて、「くも膜下出血」、「高血圧性脳出血」の診断で外来通院中あるいは新たに加療を開始する患者さんならびに患者家族のうち、本研究の主旨、研究に参加することによって生じる利益、不利益について文書で説明し、同意を得られたもののみを抽出する。外来通院患者さんに対しては、ケースコントロールスタディーとして、2004年6月以降に京都精華大学芸術学部マンガ学科(代表:竹宮恵子)と共同で作成した「病状説明用漫画」(図1、2)を使用して説明を受けた群と、2004年6月以前の「病状説明用漫画」が作成される前に病状説

明を受けた群との二群間の、病状説明に対する「満足度」、「マイナス評価」をアンケート調査し、結果をMann-Whitney検定を用いてレトロスペクティブに比較検討する。患者属性については、年齢、性別、疾患名、各疾患の重症度、手術の有無などを用いて評価する。

初診で新たに加療を開始する患者さんに対しては、「病状説明用漫画」を使用して病状説明を行い、病状説明に対する「満足度」、「マイナス評価」のアンケート調査を行い、結果を重回帰分析でプロスペクティブに評価する。

4. 研究成果

「このような病状説明用漫画がもっと普及すれば良いか?」との問い94%がとても思う、思うと回答し医療用漫画浮球への患者側の強い期待が明らかとなった。一方医師からの病状説明を理解する手助けとなったか、という問いに対しとても役立った、役立ったと答えたのは7割にとどまり、「字が多い」「ページするを減らし絵の割合を増やしてほしい」などの意見があがった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表](計 4件)

インフォームドコンセントにおける病状説明用漫画の可能性 第70回日本脳神経外科学会総会 2011年10月28日 横浜市 古野優二, 笹島浩泰, 谷山市太, 会田和泰, 大和田敬, 立澤和典, 峯浦一喜

芸術的アプローチ(漫画)を用いた医療イノベーション戦略研究 第9回日本臨床医療福祉学会 2011年8月20日 松本市 古野優二, 笹島浩泰, 谷山市太, 会田和泰, 大和田敬, 立澤和典, 峯浦一喜

Informed consent using medical comics for a stroke patient's family 22th European Stroke Conference May 28, 2013, London UK Yuichi Furuno, Hiroyasu Sasajima, Kazuyasu Aita, Takuya Kawabe, Kei Owada, Kazunori Tatsuzawa, and Katsuyoshi Mineura

Non-linguistic approach in informed consent for stroke patient's family 23th meeting of the European Neurological Society June 8, 2013, Barcelona, Spain Yuichi Furuno, Hiroyasu Sasajima, Kazuyasu Aita, Takuya Kawabe, Kei Owada, Kazunori Tatsuzawa, and Katsuyoshi Mineura

6 . 研究組織

(1)研究代表者

古野 優一 (Furuno, Yuichi)

京都府立医科大学・医学研究科・助教

研究者番号：20453102